

県内避難者 寄り添い、続け

日本震災 東大 15年

東日本大震災から15年が過ぎた。当時、福島県立医科大(福島市)の講師として、東京電力福島第一原発事故の脅威を経験した岡山大医学部教授(公衆衛生学)の神田秀幸さん(53)は、福島を離れてからも「あの時を知る者の使命として力になりたい」と、被災地から県内に避難してきた人たちの声に耳を傾け、寄り添い続けている。

(高田理那)

岡大・神田教授



「災害は突然起きるもので、被災者にも支援者にもなりうる。お互いを尊重する気持ちを大切にしたい」と話す神田さん(岡山市北区)

神田さんは2011年3月11日、福島第一原発から約60キロ離れた医科大の研究室内で、学生ら約10人と過ごしていた。少し揺れを感じ、数日前から続いていた小規模の地震かと思つたのもつかの間、経験したことのない激しい揺れに襲われた。

慌てて机の下に隠れると、棚から本が次々と降ってきた。「潰されて死ぬ」。揺れが収まり、学生らの無事を確認した後、急いで妻に電話したがつながらない。慌てて職員用宿舎に駆けつけ、妻と3人の子供たちの無事がわかり、安堵した。

一方、医科大はすぐさま災害本部を設置。同12日、第一原発の1号機が、同14日には3号機が水素爆発し、放射能が漏れ出した。付属病院では待合の椅子を取っ払ってベッドを並べ、職員らが防護服を着て、運び込まれてくる重症患者らの放射線量を測るなどして対応に追われた。

先行きの見えない恐怖に見舞われたが、担当教授の「僕たちができる」ことを考

福島で講師時被災 相談に耳傾け 心のサポート

えよう。環境測定は得意分野だ」という一声で、「ここで責務に向き合う」と決意を固めた。当初は家族と一緒に逃げたいという気持ちもあつたが、同月下旬、妻と子供たちを妻の実家の千葉県へ避難させ、「今生の別れになるかもしれない」と覚悟した。

医科大は4月、学内160か所で放射線量の測定を実施。その結果、草や芝などは、土やアスファルトに比べて地面に落ちた放射性物質がとどまりやすいことが分かった。特に、屋根の上の放射性物質が雨で流されて集まる排水溝や、物陰のコケなどは放射線量が高かった。

神田さんも当時小学1年生だった長男が千葉への転校直後、福島から来たという理由でいじめられた経験があり、「精神的サポートの大切さを痛感している」と話す。

11日は岡山市内で黙とうをささげた。いまも年に1回は福島県立医科大の非常勤講師として福島に足を運び、7年住んだ福島県を「第二のふるさと」と呼ぶ神田さん。相談者には「さすけねえか(問題ないですか)」「と福島弁で話しかけることを心がけているといい、

「離れていても、自分ができる支援を続けて、見守りたい」とほほえんだ。

その後、出身地の島根県などの大学勤務を経て、19年8月に岡山大に着任。以降、被災者を支援する一般社団法人「ほっと岡山」(岡山市北区)に協力し、県内避難者の相談に応じてい